様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：１４７０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２０１０～２０１２
課題番号：２２５６０６１１
研究課題名（和文）歴史的風致の維持向上による中山間集落活性化のパッケージモデル
研究課題名（英文）Integrated way of enhancing the minor communities on the view point of heritage environment

研究代表者
本多　友常（HONDA　TOMOTSUNE）
和歌山大学システム工学部教授
研究者番号：２０３０４１８１

研究成果の概要（和文）：
紀伊山地霊場の中心を成す高野山山上の「中心地区」と、「山外周辺集落」の相互関係において発展してきた地域環境を、統合的な活性化の視点からその課題について調査分析を行ったものである。
山内の中心部東西小田原地区においては、商業的・空間的環境整備の変遷を、山外の周辺集落においては、集落構成、生活の実態調査および南海電鉄駅舎の実測調査を実施し、同時に「むらづくり支援員」の応募動機とその実態の分析を行なった。

研究成果の概要（英文）：
Mount Koya is known as one of the most sacred sites in Wakayama peninsula where an esoteric Shingon sect Buddhist temple complex occupies a stretch of narrow flat land on top of a rugged mountain. The town is famous as the having been prohibited to women for religious reasons until 1872.
The sacred sites and pilgrimage routes that make up the whole area of land are listed as a UNESCO World Heritage site and attract more than 1 million visitors every year from all over the world. But the peripheral villages which have functioned as suppliers of commodities to the top of mountain such as food, fuels and Buddhist altar fittings have been declining because of the aging and depopulation of villagers. Some of them are expected to disappear in the near future and some have already vanished.
We need to overcome challenges connected to the issue of the problem surrounding these small communities from the view point of culture, environment, economy, local industry and education. This is a report of synthetic research into heritages and activities of the villages aiming to keep them sustainable in terms of living environment.
The result of analysis clarified the transformations of the town structure on top of the Koya Mountain since 1888, according to the changes of the ways of neighboring village lives. The research of village supporter’s activities aiming to keep the villages sustainable found that the newcomer’s different values or ways of thinking may also cause psychological conflicts in the community. But for such small communities, the ability to

accept and attract people from the outside is essential. From the viewpoint of sustaining conditions, preserving aspects of a local environment, such as architecture and landscape scenery, in which one can root one's identity and live well is of great importance. The measuring documentation of wooden station structures of Koya line was also carried out as part of recording the local heritages.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：工学
科研費の分科・細目：建築学/都市計画・建築計画
キーワード：景観・環境計画

１．研究開始当初の背景

「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録された高野町は、その主要な地域として年間 120 万人が訪れる参詣と観光の町として知られている。しかし現在は人口 4000 人を下回り過疎認定地域となり昭和 50 年代以降の人口減少が進行し、特に町の９割を占める山間部には小規模集落が点在し、そのほとんどがいわゆる限界集落と呼ばれる状態に置かれ始めている。そこには既に消滅した集落もあり、このままでは修行と宗教学に特化した山上（高野山地区）の文化を支えてきた周辺集落との共存関係が崩壊しかねない状況に置かれている。それら集落の歴史的な位置づけについては、この地域が密教文化とともに歩んできた歴史的な特徴に深くかかわってきた中山間集落であることが既に明らかにされている。しかしその将来像は高齢化に伴う自然消滅の危機を深く暗示させる内容となっている。

一方高野町においてはこの現状を打破すべく「宗教・環境都市」を標榜し長期総合計画（平成 21 年度）において、「歴史と文化を守り伝える“こころ”豊かな高野町」をめざし各種事業の推進がなされている。この内容を列記すると、「地域再生マネージャー事業」、「村づくり支援員（集落支援員）制度」、「過疎集落における安心・安定の暮らし維持構想計画策定事業」、「過疎集落における暮らし安定のための施策モデル事業」「ふるさと雇用」などがある。

これは日本の歴史に大きな足跡を残し、今なお紀伊山地の霊場の中心を成す高野山山上の「中心地区」と食料・燃料、仏具などを山上へ供給してきた「山外周辺集落」の濃密な人的・物的相互関係を、産業及び文化的交流を含む高野町全体として現代社会の中で再構築し、有機的に活性化させるチャンスであり、学術的研

究はこの動向を格段に補強推進するものとなる。一般的にはこのような中山間地域における小規模集落の未来は、人口減少と高齢化傾向の中で将来像の見えにくい課題となっている。ところが平成 21 年度に「村づくり支援員（集落支援員）制度」において 3 名の候補者を募集したところ 164 名の応募があり、急遽増員し 5 名が採用され現在それぞれの小集落に居住を始めている。そしてその中には既に永住を表明している家族も出てきており、小集落再生への可能性を示してくれている。

２．研究の目的

当研究は歴史的中心地とそれを取り囲む村落全体の未来像を「歴史的風致の維持向上による中山間集落活性化のパッケージモデル」として捉え、過疎高齢化集落とその中心域を、現代社会において統合的に再構築していく社会的・空間的環境整備を目的とする。紀伊山地霊場の中心を成す高野山山上の「中心地区」と、「山外周辺集落」の相互関係において発展してきた地域環境を、現代社会の中で再構築し、過疎化の危機に瀕している小規模集落と中心部の、互恵的な関係を組み立て直すことで、地域全体としての統合的な活性化を目指すものである。

３．研究の方法

むらづくり支援員、地域再生マネージャー、集落住民代表者、高野町役場スタッフとともに行うワークショップを通じ、地域として一体である山内、山外の課題を、個別にあきらかにしたうえで、山上の「中心地区」においては、歴史的な景観を持続改善するための基礎資料収集を行い、高野山外環道計画に備えるまちなみ修景のグランドデザイン構築を目指す。同時に「山外の周辺小集落」においては、それぞれにおいて定住促進や二地域居住、景観を大切にした整備とは何か、福祉、防災のあり方を示し、地域全体として山内、山外一体となった複数小集落の互恵的な社会的・空間的環境整備の実践的な連携のモデル化実験をおこなう。

なお歴史的資源としての景観を持続改善するための基礎資料収集を行い、歴史的建造物に対する維持保全の方法をまちなみ修景の観点から捉え、地域資産の実践的な持続性のあり方について、民家や公共建築物の事例的調査提案を行う。

同時に景観を大切にした整備とは何か、福祉、防災のあり方を示し、地域全体として山内、山外一体となった複数小集落の互恵的な社会的・空間的環境整備の実践的な連携のあり方を検討する。

４．研究成果

(1) 山内の中心部東西小田原地区においては、歴史的景観としてのまちづくりの基礎資料整備を目的として、明治 21 年の大火以降の商業的・空間的環境整備の変遷を明らかにし、過去のまちなみの復元図作成を実施した。主にヒアリング調査を進め、街並みや商店の景観について、また交通や河川の歴史的なまちなみ、高野町での暮らしや商売の仕方などの都市構造の変化を明らかにした。

(2) 山外の周辺集落においては、花坂地区、大滝、西ケ峰地区民家の実測調査を行った。同時に歴史的な景観を持続しつつ活性化への基礎調査として、集落構成、生活の実態調査を実施し、集落の歴史について、建築

生産の視点から集落景観変遷の特徴を抽出した。

(3)上記に並行して「むらづくり支援員」への応募動機とその実態の分析を行う予定であったが、個人情報保護の関係があり、集落へ居住を始めた支援員全員からの詳細なヒアリングとともに、住民インタビューを実施したうえで、高齢者の生活実態と外部からの二地域居住者または定住者と集落住人との間にもたらす共生の課題の掘り起こしに着手した。

山上を取りまく地域資産のデータ収集に関しては、特に南海電鉄駅舎の実測調査を実施し、それらの価値について歴史的背景を調査し、山内における洋風木造建造物の意味を分析した。

(4)2010年度に引き続き、調査区域を山内の中心部東西小田原地区からその周辺域に広げ、高野山内の空間変遷に関わる事象の抽出を行い、山内空間が「いつ」、「どのように」、「どんな要因で」変化してきたかを把握した。また大正・昭和・平成と生き抜いてきた山内の古老の方々を対象として「ヒアリング調査」を行い、得られた情報をマップ化し、史実にフィードバックさせることで高野山の移り変わりを明らかにした。

(5)「むらづくり支援員」への応募動機とその実態の分析を行い、集落へ居住を始めた支援員からの詳細なヒアリングとともに、一部住民インタビューを実施し、高齢者の生活実態と外部からの二地域居住者または定住者と集落住人との間にもたらす共生の課題と可能性を検討した。

(6)山上を取りまく地域資産として、南海高野線の木造駅舎の重要性が浮かんできており、周辺集落における認知度などについて予備調査を行った。また歴史的な意義、重要性についての分析、評価を行う必要性が生じてきており、そのための予備的な実測調査の精度を上げる補完調査を行った。

(7)高野山に関する文献・史料調査、山内の古老の方々を中心とするヒアリング調査のまとめ作業を進め、時代とともに変化してきた高野山の様子を明確にした。それらは法要を区切りとして捉え、次第に多様な要素（人、建物、交通、信仰）が混在する空間となっていることを明らかとし、特に昭和９年の御遠忌の際に高野山の性格を変える大きな変化が起こっていることも明らかとなった。この現象は生活環境が定常的に変化しているわけではなく、歴史的な節目が存在することを示しており、その変遷を留めることが地域資産継承の重要な視点となることを物語っている。

同時にこのように明確な歴史を備えた地域には、全国から多数の関心が集まっていることも明らかとなり、新たな支援員の流入に対する期待と課題も明確となった。高野山地域全体としては、歴史的、文化的景観の持続性に依拠しつつ将来構想を描くことの重要性が明らかとなってきており、地域資産継承のあり方において、山内に存在する最古の町家虎屋の改修（過去の当研究グループ提案）の延長として、各種施設、民家の改修のあり方についても提案を広げる結果となった。

2013年4月現在では、高野山鉄道駅舎群の保存について具体的な進展には至ってはいないが、今後のきめ細かい手当について、地域資産継承の観点から働きかけを持続していきたいと考えている。なお2012年度はこれらの成果発表に力を入れ、韓国光州でのＩＳＡＩＡ（アジア国際建築学会）、日本建築学会大会などで適宜発表を行ってきており、今後もその成果にのっとって地域活性化にむけた研究を継続していきたいと

考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① Ueda, Hiroaki; Honda, Tomotsune; Adachi, Kei; Yoshinaga, Norio; Hirata, Takayuki 「The way of sustaining small mountain villages with the program of 'Village Life Supporters System'」
査読有、The 9th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia "ISAIA 2012", pdf No.B-4-6,(光州), 24th Oct. 2012

② Yoshinaga, Norio; Honda, Tomotsune; Hirata, Takayuki; Kawasaki, Masayuki; Ueda, Hiroaki 「Restoration of The Kashinozaki Lighthouse Keeper's Residence」
査読有、The 9th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia "ISAIA 2012", pdf No.A-12-5,(光州), 24th Oct. 2012、

③ Honda, Tomotsune; Hirata, Takayuki; Kawasaki, Masayuki; Yoshinaga, Norio; Ueda, Hiroaki 「The report on the preservation and reuse of Koyaguchi elementary school」
査読有, The 9th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia "ISAIA 2012", pdf No.A-11-1,(光州), 24th Oct. 2012、

〔学会発表〕（計９件）

① 野津佑紀、本多友常、平田隆行、「聖地高野山の変遷~山内空間に着目して」、2013 年度日本建築学会大会,（北海道）、2013 年９月１日

② 上田寛彬, 本多友常, 足立啓, 吉永 規夫「過疎高齢化地域における集落支援員制度に関する研究　集落支援員を対象としたヒアリング分析より」、2012 年度日本建築学会大会（東海）、（名古屋）, 2012 年９月 14 日

③ 本多友常, 吉永規夫, 上田寛彬, 平田隆行「霊山高野山における南海高野線木造駅舎群の調査」、2012 年度日本建築学会大会（東海）、（名古屋）、2012 年９月 12 日

④ 上田寛彬, 山本春美, 本多友常, 足立啓, 平田隆行, 宮川智子、「高齢過疎 A 町におけるむらづくり支援員事業に関する研究」、日本建築学会近畿、（大阪）、2012 年６月 18 日

⑤ 上田寛彬, 山本春美, 本多友常, 足立 啓「高齢過疎 A 町におけるむらづくり支援員の志望動機に関する研究」、老年社会科学会、（長野）2012 年６月 10 日

⑥ 北野善敬、本多友常, 吉永規夫、平田隆行、「高野紙十郷の紙漉き景観と空間的使われかた」、2011 年度日本建築学会大会（関東）、（東京）、2011 年８月 24 日

⑦ 本多友常、 岸田祥、 吉永規夫、 平田隆行、「建築生産から見た高野山における集落環境の変容と特徴」、2011年度日本建築学会大会（関東） （東京）、2011年8月23日

⑧ 吉井勇樹（和歌山大）、吉永規夫、本多友常、平田隆行「高野町むらづくり支援員事業に関する研究」、2011 年度日本建築学会大会（関東）、（東京）2011 年８月 23 日

⑨ 丹野紗江 , 本多友常, 森弘子, 吉永規夫, 平田隆行、「高野山木造駅舎群の現代における文化的資産としての、独自性」、日本建築学会近畿、（大阪）、2011 年６月 18 日

６．研究組織

(1)研究代表者

本多　友常（HONDA TOMOTSUNE）
和歌山大学・システム工学部・教授
研究者番号：20304181

(2)研究分担者

足立　啓　（ADACHI KEI）
和歌山大学・システム工学部・教授
研究者番号：50140249
宮川　智子（MIYAGAWA TOMOKO）
和歌山大学・システム工学部・准教授
研究者番号：30351240
平田　隆行（HIRATA TAKAYUKI）
和歌山大学・システム工学部・准教授
研究者番号：60362860